

2008 年度 小委員会活動成果報告

(2009 年 2 月 10 日作成)

小委員会名	都市環境気候図小委員会		主 査 名：渡辺浩文 就任年月：2005 年 4 月
所属本委員会 (所属運営委員会)	環境工学本委員会 (都市環境・都市設備運営委員会)		委員長名：井上 勝夫 主 査 名：渡辺 浩文
設 置 期 間	2005 年 4 月 ～ 2009 年 3 月		
設 置 目 的 各年度活動計画 (箇条書き)	1. 自治体・住民らとともにワークショップ・シンポジウムを開催 2. 都市環境気候図にかかわる標準化の可能性を検討		
委員構成 (委員名 (所属))	委員公募の有無：有		
	渡辺浩文 (主査：東北工業大学)、鳴海大典 (幹事：大阪大学)、竹林英樹 (幹事：神戸大学)、石田秀樹 (北海道東海大学)、平野勇二郎 (群馬大学)、足永靖信 (建築研究所)、成田健一 (日本工業大学)、岩井一博 (信州大学)、芝池英樹 (京都工芸繊維大学)、吉田篤正 (大阪府立大学)、宮崎ひろ志 (姫路工業大学)、清田誠良 (広島工業大学)、依田浩敏 (近畿大学)、堤純一郎 (琉球大学)、ほか協力委員数名		
設置 WG (WG 名：目的)	名称：都市環境気候図標準化検討WG 都市環境気候図作成のための学会基準を集中的に検討し、小委員会で審議する原案を作成することを目的とする。		
2008 年度予算	90,000 円	ホームページ公開の有無：無 委員会 HP アドレス：	

項 目	自己評価
委員会開催数	1 回 (年度内計画を含む)
刊行物 (シンポ資料等は除く)	
講習会	
催し物 (シンポジウム・セミナー・研究会・見学会等)	1. 公開勉強会「都市環境クリアトラスの標準化に向けて I」 参加者数 25 名 7/24, 日本建築学会会館
大会研究集会	
対外的意見表明・パブリックコメント等	
目標の達成度 (当初の活動計画と得られた成果との関係)	1. 今年度はワークショップ開催に至らなかったが、これまでの成果に基づき標準化の方途について議論を進めることができた点は評価できる。 2. 具体的な標準化の過程として公開勉強会を開催し、標準構成・作成方法等に関する小委員会としての見解を公開し、関連他分野の研究者の意見も聴取した上で、ある一定の合意そして残された課題の明確化がなされた。
委員会活動の問題点・課題	1. 刊行予定書籍の遅れ

* 小委員会活動成果報告書は本書式を基本とする。ただし、それぞれの本委員会において活動実績を報告する共通項目があれば、最下段に項目を追加して記述してもよい。

* 中間年度には中間評価を、最終年度には最終評価としての自己評価を記入すること。

2008 年度 小委員会活動 自己評価

(~~中間年度評価~~・最終年度評価)

総合評価 (4段階評価)	A	B	C	D
<p>総合評価に関する 自由記述欄 (理由、特記事項等)</p>	<p>小委員会設置期間での最大の成果は、都市環境気候図の標準化に向けて委員間の大枠の合意がなされ、これについて詳細な議論を開始することができたことである。</p> <p>下図に示すように各委員の本分野での研究深化・進展が基本的に不可欠なことであるが、大会等はもちろん、本小委員会が実質的に運営に関わる都市気候学会議等にて最新の研究成果の発表を実施するとともに、特に先進的なドイツの情報収集を効率的に行ってきた。</p> <p>ワークショップについては、2005年・長野そして2007年・神戸市長田区にて開催し、これまでの取り組みとあわせ標準的な構成について、新体制にて次年度には公開勉強会を開催する方向で議論が進んでいる。</p> <p>都市環境気候図そのものについては活動成果報告に記載のとおり既に小委員会としての見解を公開勉強会にて公表・議論したところで、標準構成や作成方法については理解を得られた。ただし測定方法に関しても標準化の可能性が指摘され、今後の課題として挙げられた。</p> <p>新体制では、これらの議論を取り纏め「本会編：都市環境のクリマアトラス、ぎょうせい（委託刊行物）、2000」の改訂に活かすことを念頭としている。</p> <div data-bbox="699 1153 1396 1653" style="text-align: center;"> <pre> graph TD A[各研究者(委員)による各地各様の都市気候解析] --> B[「都市環境のクリマアトラス(ぎょうせい(委託), 2000)」刊行] B --> C[各委員の研究 深化・進展] B --> D[都市計画への展開 住民参加の試み (ワークショップ・勉強会)] B --> E[関連情報収集] E --> F[規格] E --> G[入門書] F --> H[「建築・都市計画のための気候学入門 (Klimafibel) 訳書, 直営」刊行予定] G --> I[「環境気象学 (VDI3787) 訳書, 環境情報 科学センター, 2004」発行] C --> J[標準化の検討 (2005年度以降の課題)] D --> J H --> J I --> J </pre> <p>標準化の検討(2005年度以降の課題)</p> <p>例えば(対象とするスケールに応じて)、</p> <ul style="list-style-type: none"> 留意すべき気候現象とその測定法 GISの活用とマップ表記法 都市計画への展開(基本計画・再開発・住民参加) など <p>(2005年, 渡辺作成)</p> </div>			

- 総合評価は4段階(A>B>C>D)にて、自己評価すること。
- 中間年度における自己評価は、単年度の活動計画・目標に対する達成度にて、最終年度における自己評価は、小委員会の設置目標に対する達成度にて評価する。自己評価の目安は以下の達成度レベルを参照のこと。
 - A 評価：小委員会設置目標に対し、80%以上の達成度
 - B 評価：小委員会設置目標に対し、70%から 80%の達成度
 - C 評価：小委員会設置目標に対し、60%から 70%の達成度
 - D 評価：小委員会設置目標に対し、60%以下の達成度
- 小委員会の活動に対し、第三者的評価・外部評価（シンポジウム、セミナー等の催し物を開催した場合に収集した参加者の評価など）に相当する情報がある場合には、その内容も記述すること。